

坂井米夫『アメリカ便り』に見る原水爆と原子

— 占領下NHKラジオ言説の一端

坂 口 博

はじめに

二〇一三年四月末、福島市での原爆文学研究会に参加するため、福岡から東京へ向かう航空機上で、加納実紀代の新刊『ヒロシマとフクシマのあいだ』（インパクト出版会、13・3）を読んだ。その「ラジオでは四八年二月から「アメリカ便り」が放送」という一節に目がとまる。もちろん、ここは「アメリカ文化⇨電化生活」というイメージが大衆的にばら撒かれた」説明で、原水爆／原字力に触れた箇所ではない。

「映画だけではなく、いろんな形でアメリカ文化の優位性がアピールされます……この「アメリカ便り」中でも電化製品に囲まれたアメリカの家庭生活が紹介されます。「コーヒーを飲みながらラジオのニュースと天気予報を聞いて」主人は働きに出かけ、奥さんは台所のおとかけと洗濯と家の中の掃除を一緒にやります。……」といった具合です。こうした情報によって、アメリカ文化⇨電化生活というイメージが大衆的にばら撒かれた

と言えるでしょう」（「原子力の平和利用」と女性解放」と、記されている。

この、NHK「アメリカ便り」は、坂井米夫^{よねお}（一九〇〇〜七八）という佐賀市出身の国際的なジャーナリストが、ワシントンから毎週十五分番組の原稿を送ったものだ。日米開戦前から米国に滞在して、そのまま戦争終結を迎えた。この放送の一部は活字として残されている。読んだ本には、確か原水爆に関するものもあったことを、記憶していた。

ほとんど忘れさられたジャーナリストに、関心を抱いたことがある。数冊の著書を読み続けるなかで、自由人として主に欧米を流浪した軌跡は、ほぼ掴むことができた。ただ、彼の言説が当時の日本の言論界に与えた影響は、よくわからないままだった。この「アメリカ便り」という番組を手懸かりに、少しでも明らかにできないものかと考えた。

ただ、一九五三年生まれの私は、当時の反響を知らない。どのような放送だったのか、その実態も不明である。戦後日本へのアメリカ文化の伝播に「貢献」したとすれば、原子力関係の言説を

辿り、影響の痕跡がないのか検証したい。それが、本稿の動機である。

一 坂井米夫について

坂井米夫について触れた文章のいくつかを、まず紹介していきたい。

一九五一年生まれの山口晴美は、「佐賀生まれの国際ジャーナリスト——坂井米夫」（福岡スペイン友好協会監修 川成洋／坂東省次編『スペインと日本人』＝丸善ブックス 107、06・7頁所収）のなかで、次のようにまとめる。

一九四七年、坂井は『東京新聞』のワシントン特派員となり、敗戦国のたつた一人の駐米記者として、途轍もない辛酸を舐めざるを得なかった。……

やがて、坂井の名前が日本中に伝わるチャンスが訪れる。一九四八年二月十四日、「私は毎日、ホワイトハウスの前を二度とおります」ではじまる、彼の「アメリカ便り」の原稿が、毎日曜日の夕方（引用者註・当初は土曜夜→夕方）、NHKのラジオ電波にのり、アメリカの政治、文化、社会をめぐっての生々しい世相を伝え、当時の日本人にカルチャー・ショックを与えたのだった。そして、この放送は、一九五二年十一月に最初の心臓発作で倒れるまで続いた。……

一九五八年、故郷の佐賀への思慕をふつきれないまま、

アメリカに帰化した。

山口は、もちろん自らの記憶で記したのではない。同時代の記憶は、一九二二年生まれの板坂元が触れていた（「坂井米夫と『アメリカ便り』」＝『潮』2000年4月号）。

七十歳代の人なら、敗戦後の日本のラジオ番組で『アメリカ便り』という人気番組のあったことを覚えている人が多かろう。当時は日本放送局（引用者註・日本放送協会）（今のNHK）から独占的に放送されていて、声の主の坂井米夫という人（同註・坂井は原稿送付。声はアナウンサーの志村正順）は、歯切れのよい言葉でワシントンから米国生活の実情を明るく送ってきていた。……

坂井は、日本の民主化、日米間の感情のわだかまりを緩和するという米国の政策に協力して、敗戦後の物資不足に悩む日本人に近代生活のあるべきようを訴えつづけた。……
……単行本になった彼の『アメリカ便り』は、版を重ねて広く読まれたが（同註・増刷は今のところ1巻以外は未確認）、坂井米夫という人は、あまり知られていなかった。

実際に知り合いの八十歳前後の方に訊ねたところ、後に早稲田大学英文科へ進学された方は、高校生のころによく聴いたという話だった。ただ、記事を送った坂井の名前までは記憶にとどめてはいない。これは、加納実紀代も同じ事情に違いない。

さて、坂井本人は、『私の遺書』（文芸春秋、67・1）の「思い

出の人びと」のなかで、以下のように当手を振り返る。

一九四八年の春ごろから、五二年の十一月病気でたおれるまで、私は東京新聞に通信するかたわら、新聞社の諒解を得て、NHKに「アメリカ便り」を送った。一週一回、正味十三分間ぐらいの原稿を飛行便で送ると、名アナウンサー志村正順さんの声で、全国に放送され、ほうぼうから沢山の手紙をもらった。……

私は「アメリカ便り」を書くために、ずいぶん勉強した。……おそろしく厄介なGHQの検閲制度があつて、その規則を杓子定規以上にやかましく実施する手合が、これもいけない、あれもいかんと削る。……私は一人で、いまの米国政府がやっている対日放送より以上の成績をあげたと思つている。私は「アメリカ便り」の四年半ほどの間、米側から何一つ手伝ってもらわなかつた。まことにさっぱりして、いい気持である。

以上の事柄を踏まえ、略歴もまとめておこう。まず、インターネットの検索では「コトバンク」がヒットする。「昭和時代の新聞記者」 明治33年9月1日生まれ。大正15年渡米、邦字新聞の記者をへて、昭和6年「朝日新聞」特派員となる。23—27年NHKラジオで放送されたワシントン発の「アメリカ便り」で人気をえた。のち「産経新聞」特派員。昭和53年11月21日死去。78歳。佐賀県出身。明治学院中退。著作に「アメリカ雑記帳」など」と簡潔である。さらに詳細な経歴は、『私の遺書』の巻末「略年譜」

に掲載されている。

1900年（明治33年）9月1日、九州佐賀市米屋町に生れた。勸興小学校、佐賀中学を卒業、関西学院文科や明治学院文科に一時在学した。東京で保険会社のPR雑誌や国際情報社の「映画と演芸」に勤めた。1926年10月サンフランシスコ上陸、ニューヨーク、ロサンゼルス、サンフランシスコなどの邦字新聞につとめ、31年から戦争になるまで朝日新聞に通信した。37年5月から38年12月までスペイン内戦や中近東を巡歴、インドシナを経て帰国、すぐ中国の戦地を見に行き、満洲里から黒河、撫遠、虎林など満ソ国境を東寧まで見て、張鼓峰から朝鮮を経て帰京した。緒方竹虎主筆署名のクレデンシャル（「信任状」と「朝日新聞記者」の旅券をもらつて再渡米。太平洋戦争中一時キャンプに入れられたが、コロラド大学の海軍の日本語学校の教師になり、46年ワシントンに移住、翌年夏から東京新聞に通信し、52年11月心臓病でたおれるまでNHKに「アメリカ便り」を送った。64年2月サンケイ新聞の嘱託となり、今日にいたる。この間51年、61年、63年、66年の4回帰国した。

これ以後は、故郷の「佐賀新聞」掲載の訃報（78・11・23）で補つておきたい。

坂井米夫氏（さかい・よねお）サンケイ新聞ワシントン特派

員)二十一日午前二時(日本時間同日午後四時)、ワシントンのナーシング・ホームで老衰のため死去した。七十八歳。佐賀市出身。

佐賀中学卒業。関西学院、明治学院に学んだあと、一九二六年(大正十五年)渡米、サンフランシスコ、ロサンゼルスで邦字新聞社に勤務。三二年から朝日新聞特派員となり、スペイン内乱、中近東、インドシナなどを取材。さらに日中戦争を取材後、三八年(昭和十三年)に再渡米し、戦後の四七年から東京新聞ワシントン特派員。この間、五二年までNHKに「アメリカだより」を送り、戦後初の日本人特派員としてラジオで米国情報を伝えた。

故坂井米夫氏と親交のあった故栗原荒野あらの氏の長男耕吾こうごさん(四六) 〓佐賀市多布施四丁目〓の話 坂井さんと父は若いころから親しい文学仲間だったらしく、よく話を聞かされていました。何事にも束縛されない自由な気概の持ち主だったと思います。五、六年前、帰国の折に私の家に遊びにこられました。その時も心なしか病弱な感じがしておりました。まだまだ活躍を祈っておりましたのに、残念です。

葉隠研究家として知られる栗原荒野(大阪毎日新聞社佐賀支局長などを務める)だけでなく、劇作家・三好十郎とは小学校・旧制中学時代からの親交があるのだが、これについては本稿とは関係ないので立ち入らない。

生前の著書には、『ヴァガボンド通信』(改造社、39・2)、『続

ヴァガボンド通信』(改造社、40・10)、『ヴァガボンド・裏』(板垣書店、48・2)、『アメリカ雑誌帳』(板垣書店、48・11)、『新アメリカ便り(1)』(名曲堂出版部、49・5)、『アメリカ便りII』(名曲堂出版部、49・11)、『日系市民YUKI』(名曲堂出版部、49・11)、『日系市民YUKI』サンケイ新聞社出版局、69・7)、『アメリカ便りIII』(名曲堂、50・5)、『坂井米夫詩集』(思潮社、66・4)、『私の遺書』(文芸春秋、67・1)がある。没後、『ヴァガボンド通信』を編集しなおした『動乱のスペイン報告』(彩流社、80・11)も刊行される。

『続ヴァガボンド通信』は、日米開戦前に雑誌「改造」へ精力的に寄せた「アメリカ便り」等をまとめたもので、NHK放送のうち一九五〇年二月あたりまでの、まる二年間分は『アメリカ便り』の三冊に収められた。それ以後、五二年一月までの放送原稿については、現在のところ不明である。

二 雑誌寄稿とラジオ放送

坂井の原水爆や原子に関する言説を見ていく前に、一九三九年以降の雑誌「改造」に掲載した文章を一覧しておこう。緊迫する日米関係のなかで、彼の言論活動の、もう一つのピークをなしている(参考までに戦後の「通信」も含める)。

一九三九年(第21巻) 7・8月(7・8号)「アメリカ紀行(ヴァガボンド通信)」(二・其二) 11・12月(12・13号)「ヴァガボンド通信―アメリカ便り」(その三・その四)

一九四〇年(第22卷) 2月(2号)「ヴァガボンド通信」 2

月臨時増刊号(No.3/3号)「動いてゐるアメリカ(米國報告)」

3月時局増刊号(No.4/5号)「アメリカ打診―失効後の対日動向」

5月(8号)「アメリカの明暗―アメリカ通信」 7月時局版

(No.8/13号)「参戦するか米國」 8月(14号)「アメリカ立ち

上がる―ヴァガボンド通信」 10月(18号)「アメリカの両洋政策」

一九四一年(第23卷) 1月時局版(No.14/2号)「アメリカ全

体主義國家へ―アメリカ通信」 5月(9号)「戦時アメリカの

勞働爭議」 7月(13号)「参戦前夜のアメリカ―アメリカ通信」

11月(21号)「臨戦アメリカ通信」

一九四八年(第29卷) 11月(11号)「歴史の悲劇にまき込まれ

た二人(ヴァガボンド通信)」

一九四九年(第30卷) 1月(1号)「大統領とミスター・プレ

ジデントの間(ヴァガボンド通信)」 2月(2号)「共產党スパイ

事件(カポチャから出た機密文書)―ヴァガボンド通信」 4月(4

号)「米國共產黨の姿態―ヴァガボンド通信」 6月(6号)「ヴ

ァガボンド通信 第5信―ワシントンにて」

前述したように、四〇年一〇月までは『続ヴァガボンド通信』として刊行されているが、開戦直前の四一年分は未刊である。発表月号に「時局版」通刊No.と巻次の通号を()内に記載した。

雑誌「改造」は三九年九月の欧州における第二次世界大戦の開始から、「臨時増刊号」(のちに「時局版」と呼称)を頻発するようになる。四〇年二月以降は、四一年一二月の「時局版」第25号まで

毎月出ている(横光利一の長篇小説「紋章」続篇は、この「時局版」に9回1140・3く11連載された)。雑誌ジャーナリズムは、戦争とともに、激動する世界情勢を伝えるために「発達」を遂げているのだった(同じことは、「中央公論」臨時増刊号や「文芸春秋」現地報告版にもいえる)。

さて、まだ航空便のない時代に、日本郵船のサンフランシスコ便「浅間丸」の出帆時間を気にし乍ら焦躁の気持で書いたという「参戦前夜のアメリカ」では、「第一、日米戦争は避けられた方が双方のためである。第二、どうしてもかうしても戦争をしなければならぬといふなら、何より米國の情勢判断を謬らぬこと。……國家對國家といふ重大な問題になると、相手方の本當に適確な実状を知るには、先入偏見や好き嫌ひを別にして現在のありのまま、を正しく見ることが大切である」として、「米國は英國に踊らされて全体主義國家群に對抗してゐるのではない。〃宣伝上手の支那にだまされて、抗日支那を援助してゐるのでもない。米國は米國自らのため英支を援け、全体主義國家群に向ひ合つてゐるのみである」と指摘する。米國內の輿論調査の結果なども伝える。同様の主張は、「アメリカ全体主義國家へ」へでも、「敵ならば尚更のこと、相手を正視し確實にその長所短所をありのまま知る事が最も大切である。……今、私が米國の弱点や短所を誇大に書きならべることは、一番容易で大向ふに受けるであらう。が併し、それは日本のためではない」、「日米戦争を飽くまで避けて、凝つと海路の日和を待った方があらゆる角度から考へて遙かに賢明である」と繰り返していた。

その上で、「臨戦アメリカ通信」では、「愛國とは、時局の振り

子に迎合してカメレオンになることではない」と、開戦前の最後となる警鐘を鳴らしていた。

敗戦直後にも「ヴァガボンド通信」としてアメリカ・ワシントンからの通信を再開したが、それよりもNHKラジオ放送で、坂井米夫の言説と名前は広く知られたのだった。当時の新聞ラジオ欄によると、一九四八年二月一四日（土曜）の午後9時15分から15分番組で「米国便り一信 坂井米夫」を確認できる。「鐘のなる丘」や「二十の扉」といった人気番組が、夕方からは放送されている。これが、四月三日（土曜）午後6時45分となり、翌四九年四月一〇日（日曜）では、7時15分と曜日・時刻が変更になる。これは五一年一月二五日（日曜）までを確認できた。この頃は、

「とんち教室」「私は誰でしょう」などを見る（なぜか、毎週連続したり、しばらく番組表に見なかったりと不定だが、放送時間は7時のニュースのあとに固定されている。五二年一月頃には見ない。ただ、当時の番組欄はスペースも限られて、現在のように詳しくなく、かなりの省略があるように見受けられる）。

いわゆる「ゴールデンタイム」、土曜・日曜のもっとも聴取者の多い時間帯へ移動してくことでわかるように、その人気にともなう影響力は大きかったようだ。「はじめに」で挙げた加納や、「坂井米夫について」の板坂証言を裏付けるものといえよう。

三 坂井米夫の言説

ここでは、刊行された『アメリカ便り』のなかから、原水爆や原子に関する言説を抽出して紹介したい。前述したように、放送

当初の二年分からであり、また放送原稿とまったく同じか否かは検証不可能である（タイトルは一日分の題、幾節かにわけた細目の題名は文末に記した。※は引用者の註である）。

「日本の桜」 48年4月頃

（ヨーロッパやアジア大陸の雲行きがただごとではありませんので、……）花見時にふさわしくないこうした空気のさ中に、日本人として一寸肩身がひろくなるニュースがありました。その一つは、カリフォルニア州立大学の農科で研究している高橋さんという若い第二世の博士が、トマトや青い野菜などに寄生して、葉っぱに寄木細工のような斑点をつくる「モザイク」という小さな菌の駆除に成功しました。……

今一つは、これもカリフォルニア州立大学で、ラッテス、ガードナーという二人の若い化学者が、その大学の原子研究所に備えてある四千噸の原子破壊装置、つまりサイクロトロンと呼ぶ機械の中で、これまで宇宙線の中でしたか発見出来なかつた素粒子つまりメソン（Meson）を人工的に造り出すことに成功しました。原子というのは、例の原子爆弾のアレのことですが、原子核の研究と、宇宙線の研究とは、密接な関係があるということです。千九百三十四年即ち昭和九年に日本の原子研究者湯川博士が、今まで未知であった原子核の中に、何か新しい粒子があることを予言し、原子核と原子核とを結びつけているナニモノかがあるはずだという学説を世界の学界に発表されました。……そのナニモノかを世界の学界では湯川粒子と呼び、のちにメソンつまり中間子と名づけました。

この湯川博士の説に刺戟されて世界各国の学者が一生懸命研究し、南カリフォルニアのパサデナというところにあるカリフォルニア理工科大学のアンダーソン博士が、とうとうそのメソンなるものを写真にとることに成功しました。……

ありていに申しあげますと、こういうむずかしい学問の話は、私自身その方のことを勉強したわけでも何でもありませんから、無理であります。以前アンダーソン博士にお会いしてたずねたことがありましたが、よくのみこめませんでした。それならば何故自分でもよくわからない学問のことをお話ししたかと申しますと、アメリカの科学の雑誌も、主だった新聞も、今度の成功は昭和十三年に、原子爆弾のモトになったウラニウム原子の分割に成功したとき以来の意義深い出来事であると報道し、まだわからないうちでいる原子核の構造や、宇宙線の研究などに劃期的な光明を与えるものとして、紐育タイムズの社説には、わが湯川博士の名前まで出して紹介しているので、皆さまにお伝えしたような次第であります。(注目の日本科学「I 50」52頁)

「尊敬される学者」 48年夏頃

……さあ、ここで一寸おたずねしますが、ユカワ・ヒデキさんという方をご存じでしょうか。アメリカにいた日本人の間では、三年前までごく僅かの人しか知りませんでした。広島に原子爆弾がおとされてから、アメリカの雑誌にユカワさんの名前がちよいちよい出るようになって、ほう、そんな学者が日本にもいたのか、と初めてびっくりした人が多いのです。

学問上まだ新しい研究である放射線の原子の力を爆弾だけな

く、人類の幸福のために役立つようにしようと、アメリカでは一生懸命努力しております。最近アメリカの当局者から正式に発表されたところによりますと、これを利用して鋼鉄や人絹の質はずっと改良されるようになったし、そのほか、胃癌だとか、唇や舌の癌だとか、なかなかむずかしい病気である癌がひろがらないように喰いとめるのにも、実験されているそうです。

茶碗やお皿など焼物に青い絵をかいてあるのがあります。昔から俗に「ゴス」といわれている、あの絵の具のものはコバルトです。これを原子爆弾をこしらえる放射性原子のそばにおくと、目に見えないその放射線をコバルトが吸って、今度はもつと強い力で放射線を出すようになるのですが、この性質を利用してコバルトを細い細い棒や針の形にして、放射性原子の上においたものを、ラヂュームのかわりに使うことになったのです。

御存じのように、ラヂュームはペラ棒に高いもので、アメリカでも一グラム、即ち一匁の四分の一にも足りない粟粒みたいなのが、二万弗以上という相場ですから、……

原子爆弾をこしらえあげた生みの親ともいうべき人は、オッペンハイマーという今年四十四になる物理学者であります。……(放射医療)

戦争中原子爆弾製造の方にもつぱらたずさわっていたこのオッペンハイマー氏は、今ニュージャージー州の大学町プリンストンにある高等学術研究所の所長をしております。この研究所は日本からの留学生が以前よく行ったプリンストン大学とは何の関係もなく、ここに招かれた学者たちは十二分にその生活を保証され、大学などのように学生に教えるということはありません。……

世界最高の学者のたまり場ともいふべきこの研究所が此秋日本から一人の学者を招聘することになりました。それは先に述べた京都大学のユカワ・ヒデキ教授であります。ここには日本の物理学者の間でも知られているデンマルクのボーア (Bohr)、英国のディラック (Dirac) 両氏始め、しつかりした新進の若手が相当います。シカゴ大学、カリフォルニア大学、加州工科大学その他アメリカ各地の物理学者も、今から十五年前に原子の構造についてメソン (Meson) という新しい学説を発表された、ユカワ教授のお話を是非ききたいと望んでおります。

学問に国境なし——広い芝生にかこまれたこのプリンストンの学術研究所で、アインシュタイン、オッペンハイマー、ボーア、ディラックその他の学者たちに迎えられた日本の学者ユカワ教授が、メソン学説について述べられるのです。また学問上こういうものが当然あるべきはずだと、ユカワさんが理詰めに考え出されたメソンなるものを、今年、物の見事に二千トンの大サイクロトロン (Synchro-Cyclotron) —— 原子破壊器とでも申しませうか、とにかくその中でメソンを作り出すことに成功したカリフォルニア大学のローレンス (Lawrence) 博士も、ユカワ教授に人工宇宙線の写真を見せて、宇宙の神秘について語りたところでしょう。

〔自由な研究〕 I 97〜104頁)

「湯川博士の話」 49年11月頃 ※受賞決定 49年11月3日

ニューヨークの西四百二十一街五百一番地は、ながめのよいハドソン河から中央公園のほうへ三町ほどいった角のアパートです。このへんは世界でいちばん大きなコロンビア大学にすぐ近い

ので、大学の関係者が多い——と申しますと、わがりの早いかたは、ははあ、今夜の「アメリカ便り」は、ノーベル賞をもらった湯川秀樹博士のことだな、と考えられたでしょう。そうです。それにちがいはありません。

「湯川教授にノーベル賞決定」というニュースに、私はワシントンからニューヨークへとんで行きました。アメリカ中の新聞が第一面に大きく報道し、コロンビア大学の総長アイゼンハワー元帥と湯川博士がよろこびにあふれる笑顔で固く握手している写真がでています。……〔総長と感激の握手〕Ⅲ 123〜131頁)

「講和のメハナ」 50年春頃

※50年1月31日ブラドレー米統合参謀本部議長ほか極東情勢検討のため来日

アメリカの最高作戦をつかさどる合同作戦部長会議の主宰者であるブラドレー大將が、平和条約をむすんだ日本に、永久的基地をもうけるかときかれて、それを打ち消さないで、平和条約の条件によるといつたのは、アメリカの国防当局が、日本に何らかのあたりで軍事基地をもちつづけたい意向であると察しても、そうひどい見当ちがいではないからうとおもわれるのであります。(「日本の防衛」)

平和条約とは別に、日本政府とアメリカとのあいだの話しいいで、日本側がそれを承諾すれば、軍備のない日本にたいする侵略の危険がなくなり、本当の平和が実現されるころまで、アメリカは日本の防衛に責任をおうという基地についての協定がつけられるのか、今のところまだわかりませんが、この問題は早かれおそ

かれ平和条約の問題とむすびあつて、表面にでてくるでしょう。最近、平和条約の話はどういうふうにはこんでいるのか、という問合せの手紙がありました、じつのところさっぱりわかりません。(日本を基地にするか)

さまざまなこみいった事情がありますから、極東委員会の全部の国といちどきに平和条約をむすぶのは、ひじょうにむずかしいことが予想されます。で、結局のところアメリカ政府と話のまるとまる国々との平和条約ということになりそうです。(単独講和か全面講和か) Ⅲ 194 (200頁)

「あゝ水爆」 50年春頃

※50年1月31日米大統領、製造命令↓52年11月1日マーシャル諸島工二ウエトク環礁で水爆実験↓54年3月1日マーシャル諸島ビキニ環礁で水爆実験／第五福竜丸「死の灰」

その歴史的な重大問題というのは、水素バクダンをつくるかどうかをきめることだったのです。そこで今夜はこの水素バクダンの問題をあらましご報告いたしましょう。

アメリカでは今までのふつうの原子爆弾のことをA爆弾といつて、水素バクダンのほうは、化学式のHをとってHバクダンとよんでおります。水素の原子核のまわりにあるヤコシイものをちよつとつけくわえると、重い水素になり、それに撰氏の百万度かそこらの熱をくわえるとヘリウムというものにかわつて、太陽の熱や光りとおなじ性質のドエライ爆発がおこる——ということ、はずっと前から学者のあいだでいわれていましたが、何しろ百万度の熱となりますと、アダオロソ力なものではありませんので、

工にかいた棚のボタモチとおなじく、なるほどボタモチはボタモチ、本当にたべられたらなあという程度にしか考えられなかったのです。

ところで、この前の戦争のとき、ドイツが重い水素をつかつて、強力なバクダンをつくる研究をすすめているという情報がいりました。今でこそ原爆とかピカドンとかいって小学校の生徒でもよく知っていますが、その当時は専門の学者以外の人は何のことやらさっぱりわからなかつたのです。……

広島におとされたウラニウム原子爆弾や、長崎におとされたプルトニウムの爆弾などがバクハツするときは、太陽の熱よりもつとつよい二百万度の熱がおこりますから、このウラニウムやプルトニウムの原爆をミチビ〔道火〕にすると、重い水素の原子を、ちようどサナギがチヨウチヨウになるように、ヘリウムにかえることができるのであります。そこで、実はアメリカでは今から五年まえに、水素バクダンをつくれることになつていたので、それを、何で今日までだまつていたかと申しますと、次のようなワケがあります。(Hバクダン)

千九百四十五年の六月、いよいよ世界最初の原子バクダンができあがつたとき、アメリカの科学者のなかに三つの議論がありました。その一つは、日本の政府にたいして、原爆ができたことをしらせてすぐに戦争をやめるようにすすめるべきだという意見であります。第二は、これまでの実例によると、アメリカ側の申し入れをマトモにうけられる日本政府ではなく、反対に逆宣伝の材料につかつてサギをカラスといいくるめ、国民を本土の決戦にかりたてるのは見えすいているから、実際に原爆の効果がどんなも

のであるかを示すために、日本のどこかあまり人のいない山の奥あたりを通知しておいて、そこにおとしたほうがよからうというのでした。

第三の意見は、いや、そんな人里はなれた山奥におとしたら、日本の軍部はヒタかくしにかくしてゴマかしてしまふ。そこで、爆撃する町の名前をまえもって警告しておいて、住民に避難するようにした上で、おとしたらいいではないかというのですが、結局この第三の方法をとることにになりました。

ところが、その結果は、あの通り言語に絶する悲惨なことになるので、原子爆弾をつくるのに関係した科学者たちは、人道上の深い責任を感じ、ウラニウムの原爆でさえあんなおそろしいことになったのだから、それに千倍の破壊力をもつ水素バクダンなどに手をつけるものではない——という深刻な考えに支配されて、誰一人研究をすすめるものもなかったのであります。(「原爆に三つの意見」)

アメリカの新聞や雑誌、ラジオでも議会あたりでも、秘密主義のソヴィエットの態度に、とうとう「ゴー」をにやまして、このまあいづまでもグズグズしていた日には、ソヴィエットのほうがさきに水素バクダンをつくってしまふかもわからない。……アメリカはもうこれ以上、長い評定に時間をうしなわないで、水素爆弾の研究をすすめるければならぬ、という意見がすよいようです。

つまり、水素爆弾の実現にふみだすとともに、国際連合の原子力理事会なり、またはソヴィエットの最高首脳部との直接交渉なりで、一切の原子爆弾をとりしめることについて話し合をしたほうがよいというのであります。(次は水素バクダン)

私は戦争中にだされた日本の本や新聞雑誌などを、たんねんに勉強してみたことがあります。あれほど沢山でたイワユル戦時出版物のなかで、「早いとこ原子バクダンでもこしらえなければ——」と大つばらにとなえた人は、たつた一人しかみあたりませんでした。その議論がのつていた雑誌は、有名でも何でもない小さなもので、それをいつた方は徳川夢声さんです。……

……アメリカにしても、ソヴィエットにしても、人類にとりかえしのつかない破壊と死をもたらすものにはしないで、原子力のエライはたらきを、すべての人間の幸福と長生きのために、いっしょにちからをあわせて利用されるようにはしてもらいたいのであります。(先見の明のあつた夢声」Ⅲ 203〜211頁)

おわりに

結論からいえば、「原子」に関しては、ノーベル賞受賞前から、湯川秀樹「中間子」論についての高評価を、実際に米国の物理学者に取材して何度か伝えていたこと、それ以上に注目できる報道はない。畑中佳恵「メディアアの「原子」——『東京朝日新聞』という言説空間の中で」(「敍説」19、20、II 01号連載、99・8〜01・1)を見れば、朝日新聞では受賞前に湯川を見出しで取り上げたことはない。

坂井は、「原水爆」に関しても同様に目立った報道はない。しかしながら、敗戦によって米国滞在の新聞記者・特派員が、誰ひとりいなくなるなか、米国の信頼できる主要メディアから、さまざまなジャンルの記事を、ピックアップしていったことは、その

選択の価値判断はともかくとして、再評価してもいいだろう。

なお、「先見の明のあつた夢声」として、雑誌掲載に触れているが、その特定はできなかった。ただ、徳川夢声（活動写真弁士・漫談家・俳優・本名・福原駿雄・島根県生まれ。一八九四～一九七一）は、『夢声自伝』や『夢声戦争日記』などで、かなり原子爆弾について触れている。一部を『日記』から抽出してみよう。

「新兵器は何うなつてゐるんだ。敵を散々引きつけておいて一気に粉砕するというような事は、もう空頼みにすぎないのであろうか？／何しろ米軍の物量は凄い。飛行機何千台で、絨毯爆撃と来る。ドイツが手をあげて、その飛行機がこっちに廻つて来たらどうなる？……大東京が一望焼野原となつて、……」（44・8・26）

「独逸が原子爆弾を使用しているという説がある。本当ならば、米英ザマーミロというわけだが、愈々人類が原子爆弾を使用するようになれば、人類の終局も近きにありという気がする。／原子爆弾が地球を破壊して、地上の生物皆成仏というのも、あながち悪くはない。」（44・12・28）

「冗談じゃない、まったく冗談じゃない！／本当だとすると、こいつ大変だ。／……ウラニウム爆弾——だかどうだか分らないが、敵が広島に使用した一物が、並大抵のものでないらしい。たつた二発でドエライ被害があつたと言う。……／それにしても、敵が物凄い兵器を使用するからと言って、頭から非人道呼ばわりをするのは滑稽である。／……日本も敗けずに、毒ガスだろうと一発万殺の新兵器だろうと使用すれば宜しい。それがやれないからというので、専ら敵を鬼畜呼ばわり、悪魔呼ばわりは、寧ろあわれで腹が立つ。……／まさかウラニウム爆弾が、敵の手によつて

発明されたとは信じられないが、なんにしても、戦争は深刻極まる所まで行くらしい。」（45・8・8）

夢声を一般市民と同じとみなすには躊躇が残る。NHKのラジオ放送にも関わり、ほか軍中枢部からの情報もかなり得ていた。八月十日には、無条件降伏の確実な話も聞いている。しかしながら、十五日の「玉音放送」には「肉体的感動」を記す夢声でもあつた（『夢声戦争日記』は、中公文庫版全7巻Ⅱ77・8～11Ⅱより）。

初版は、中央公論社、60年。『夢声自伝』もほぼ同一文。劇団「苦楽座」を結成して、内外各地を慰問巡業してまわつた仲間には、広島原爆で全滅した桜隊の丸山定夫・園井恵子もいた。同隊同行の長男・象三を亡くした高山徳右衛門（薄田研二）一家とは近所で親しくしていて、通夜から葬儀の様子も詳しく記録している。

ところで、いささか余談めくが、坂井米夫は雑誌「佐賀人」（鳥栖市）へ、晩年に寄稿を続けていた。「アメリカ通信」ならぬ「望郷通信」として11回（65・11・68・10）を重ねた。自由人・ヴァガボンド（放浪者）を自称した彼にも、故郷への思いは断ち難いものであつたようだ。

また、ここでは最初のアメリカ力滞在時の日本語新聞記者時代や、スペイン内戦時に人民戦線政府軍・フランコ反乱軍ともに従軍取材したことなど、国際ジャーナリストとしての重要な側面には触れていない。前者については、林かおり『日系ジャーナリスト物語——海外における明治の日本人群像——』（信山社、97・9）のなかで、「インテリジャーナリスト坂井米夫の愛国——反逆と勲章」としてまとめられていることを紹介して、本稿を終えたい。